

図書紹介

もうひとつのモデル社会論

—岡沢憲芙 著

『スウェーデンの挑戦』(岩波新書、一九九一年)をめぐって

永安 幸 正

「日本が経済大国路線の優等生なら、スウェーデンは生活大国路線の真面目な求道者と表現できるかもしれない」(はしがき)

「文明の成熟度は、車イスで自力走行できる距離で測定できるのではないかと思うことがある」(同)

「スウェーデン市民に財布の中身をきくことは、とてつもない犯罪であるかのように感じられる、名にし負う重税のため、可処分所得と貯金残高については話題にしないのがエチケットだ」(同)

図書紹介

理想郷を求める旅

人間は常に夢を求める。夢なしには生きられない。数年前は政治家の連続スキャンダルで、日本政治は三流という評価が定着したが、今回のバブル経済崩壊、金融・証券スキャンダルは、いよいよ日本社会の深層に潜むモラル問題をえぐり出し、日本人自身の倫理的信念とそれへの自信の根っこを侵食したことは間違いない。我々は、どんな社会を作ろうとするのか、訳が分からなくなったというのが、良心的平均人のいつわらざる心境ではないだろうか。

そこで、特に日本人は昔から、この列島の中にはなく、どこか海を越えた外国に、理想郷を描いて来たことが思い起こされる。それはよい知恵であったかもしれない。自国の歴史内のみ理想の基準を求めて復古してみても、それは第二次世界大戦敗戦をもたらした国粹主義を生み出し、ろくなことはなかったという反省と警戒が、自国文化への郷愁とともに、現代日本人の心の深層には存在する。

そこで彼方にある理想郷としては、大昔は唐天竺がある意味でそうであった訳だし、近代になると欧米モデルがそれにとって替った。明治人、福沢諭吉の脱亜入欧というスローガ

ンは、そのような転回を象徴していた。その欧米とは、ドイツ、フランスもあるにはあるが、明治以後一世紀を通じてはなかなづくイギリス、アメリカがその代表であったといえよう。それが文明開化の先達と映った。評者の育った第二次大戦後でいうと、それは、「ゆりかごから墓場まで」の福祉国家の故郷イギリス、「自由とフロンティア精神」のアメリカであった。

ただし、なぜだかフランスは、それほど日本のモデルとはみなさないで来たようだ。日本人は、フランスのファッション、絵画など一部の芸術、シャンソン、それにワインなど、個々のものにはあこがれをもつが、フランスをしてトータルなモデルとは見なさないようだ。フランス人の印象が、日本人に対してあまりフランクでないところが、いまひとつ日本人の心にしっくり来ないゆえんなのかもしれない。首相クレソン女史の日本囃みつきは、一理はあるものの、理というより、そうした日本人の態度へのいらだちの感情からくるものだろう。日本の首相は、人種問題などへの無神経は困りものだが、あのようなはしたない言い方はしないだろう。言説にも礼節をわきまえることが、東洋の心である。

えかどうかは知らないが、スイス・モデル論は、もはや昔日の思い出に過ぎないものとなった。

また、いつときデンマークがよく引き合いに出されたものだ。内村鑑三が『デンマーク国の話』を語ったのは、明治の世であった。しかし、デンマークはもはや日本では何らモデルではなくなった。東洋のデンマークなどといって持て囃された中京地区のある農村地帯も、いまでは自動車産業基地の一部になり、工業地帯になってしまったからであろう。いまさらモデルにはならない。日本の工業化は、農村型であったデンマーク・モデルを捨てさせた訳である。

他所に理想郷を求めるといふ習性に深くとらえられてきた日本人は、自己の変化発展とともに、次々と新たな理想郷を探し歩く旅をやめる訳には行かない。理想とは、内的な価値の欠乏の反映であり、欠乏から生まれる欲求の映像にほかならないが、価値の欠乏は次々と生じるからである。

これからのモデルは、なによりグローバル化、ハイテク化、情報化、高齢化、ゆとり、隣人愛、そして根本的に地球に優しい暮らし、連帯と参加の身じかな政治、といった要因を欠いてはなるまい。

もつとも近年では、さすがの英米も少し色褪せて、イギリスは英国病に、アメリカは土地は広いが麻薬とガンと犯罪に悩む没落大国になりつつあるらしいというので、もはや日本人の心情には、理想郷として訴えかける要素をもたないようにも見受けられる。おまけに、アメリカ人のもの言い方は、まず相手を口汚く攻撃しておいて、報復をちらつかせながら脅かしの交渉するというような方式になっている。自分の側の問題への謙虚な反省は微塵も感じさせない。そのようなやり方に、日本の世論は「嫌気が差す」という反応を示す。それが、アメリカ人が陰りつつある理由ではないか。困ったことではある。

けだし理想というものは、現実的でないからこそ生命をもつのであるから、現実のイギリス、アメリカの実態を知れば知るだけ、幻滅を抱くようになるのは、事の次第としては当然の成り行きなのである。

かつての日本にとって、もう一つの理想郷はスイスであった。非武装中立、永世中立、高度の精密技術国家、・・・など。しかし、スイスはあまりにも小さい国であり、現代のGNP大国日本と比較されるには、少々無理がある。それゆ

蘇るもうひとつの理想郷イメージ

旅とは、新たな人にも出会うが、また旧知の人にも再会してその人の中に新たな姿を見出すものでもある。このように理想郷が変転してくる中で、日本人には、スウェーデンといえは理想の国というイメージが、依然として強い。彼の国はそれだけ、なにか特異な国であるといえる。そのスウェーデンが、ここに来て新たな意味で注目を浴びつつある。

さて、今読んでいる『スウェーデンの挑戦』というこの本は、小著ながら、長年にわたるスウェーデン研究の蘊蓄を傾けたもので、叙述内容は、配慮の行き届いた仕込み、微妙な味の調合された京都料理を思わせる。それは、さりげない刺し身のつまにも、お吸い物にも、天麩羅にも、隠し味にも、経歴豊かな名人料理の腕前を伺わせる。事実、著者の岡沢教授は、学生時代にスウェーデンを訪れて以来、この国との付き合いは四半世紀を越えるのであり、長寿時代、中堅どころの年齢の研究者として、すでに日本の第一人者と言うにふさわしい。

人間社会の研究は、特に地域研究であればことさら、長い

年期と対象へのひたむきな情熱が要求される。しかも同時に、客観的、理性的な認識を曇らせないだけの心理的距離を、対象との間に保持する才能も要求される。その結合は天の配剤のみが能くし得るものであろうか。

さて、本書は以下のような構成をもっている。

序章 いま、なぜスウェーデンか

第一章 貧しい農業国から豊かな先進福祉国家へ

一九世紀末から一九六〇年代

第二章 福祉社会の理念と構造

第三章 スウェーデン政治のメカニズム

第四章 苦悩する生活大國

一九七〇年代以後

終章 どこへ行く「未来社会・スウェーデン」

本書は、今なぜスウェーデンが問われるのか、という発題から説きはじめる。まず、人口八五〇万そこらの、「小さい國の多彩なイメージ」が拾いあげられ、この國が世界中から、いかにさまざまなイメージをもたれているかが示される。森と湖の美しい國、ノーベル賞とグイナイトの國、胎児から墓場までの高度福祉國家、労働者がずる休みする國、超重税

スウェーデンの基本構造がいかに形成されたかが、手際よく解明されている。読者は、この章を、明治、大正、昭和という

日本の近代史と重ね合わせながら読むと、民族というものの特性を知るうえで、格好の資料を得ることとなる。

スウェーデンには、かつてはバルト海の帝王という時代もあったが、近代になってからは森と湖の國、林業と牧畜と農業からなる静かな小國でしかなかった。それは「遅れてきた工業國家」であったが、それがいかにして強力な「スウェーデン企業」を築き上げたか。近代化、工業化の基礎づくりは、鐵道の普及と教育制度の整備に大きく求められるが、これは日本の近代化と比較するとき、図らずも軌を一にする。

そして、二〇世紀前半ソ連スターリン型社会主義が圧倒的な外圧として周辺への専横をほしきままにしていたころ、スウェーデンが、いかにして中立國家としての自己を保持しえたか、労働組合を基盤とする社会民主主義黨が、いかにして形成され、いかにして発展して来たか。いかにして、国民的統合を維持し得たのか。ドイツ・ナチスの勢力に、いかに対処しえたのか。その過程で「コンセンサス・ポリティックス」という合意形成型政治が、いかにして成り立ち、機能し得た

國家、イングリッド・バーグマンなど女優を生んだ美人生産國……。かつてのハマーシヨルド國連事務総長もこの國の出身であった。

しかしいずれにしても、スウェーデンが「好感度の高い実験國家」といえるように、世界から好かれる國であるということは、日本という國に生をうけたものとして、評者も強い関心のある点である。世界における最近の日本は、好感度必ずしも高からず、という負の一面を持つからである。

その印象度のギャップのゆえには、中立國か、かたや戦争で世界を混乱させた國か、というように歴史に根差す外交や戦争の問題もからむであろうから、単に福祉政策だけの問題ではなく、先祖以来の、國家民族としての生き方の質、文化価値が問われるのであろう。顧みて、まずそういうことを考えさせられるのが、この序章である。

次いで第一章、「貧しい農業國から豊かな先進福祉國家へ」においては、今日の基礎を作った歴史の紹介に出会う。今というものは、過去の産物であり、過去の理念とそれを目指してのひたむきな歩みとの結実であるが、ここでは一九世紀末から一九六〇年代にかけての歴史過程を通じて、福祉國家ス

のか。

その点を考察するに、岡沢教授は、本書ではあまり触れてはいないが、ドイツとソ連という二つの外圧に囲まれたというのみでなく、歴史的に形成された國民の集合的潜在意識の特質として、この國が強固なキリスト教國家であること、民主主義において象徴的な王制がうまく機能して来たことなど、國民文化、國民のモラルの特質にも注目したい。

そして戦後いかにして、イギリスとまた一味違った理念と政策とでもって、本格的な福祉國家としての発展を実現し得たのか。著者は政治学者であり、なかんづく政黨論と連合政治論で新境地を開拓して来た人だけに、単に經濟論でなく、福祉國家を作り上げる國民と指導者の人間的な動きが、政治論としてもヴィヴィッドに伝えられる。この点を、どこかの國の与党にも、また特に万年反對黨と揶揄された野黨の諸君にも、とくと味読してもらいたい。そう願うのは、評者だけではあるまい。

福祉社会の政治経済学

第二章は、スウェーデンの福祉國家理念と現実の經濟的側

面を紹介している。いわば、福祉国家の政治経済学ないし社会経済学である。

福祉社会スウェーデン・モデルの発端は、一言で表せば「国民の家」という理念に集約されるという。これはハンソンが提示した概念で、次のような意味を表すとされるものである。

「胎児から墓場までの人生のあらゆる段階で、国家が、よき父として人びとの要求・必要を包括的に規制・統制・調整する『家』の機能を演じる社会である。」

「国民の家では、誰一人として抑圧されることがない。ここでは、人びとが助け合って生きることであり、闘い合うということはない。また階級闘争ではなく協調の精神がすべての人々に安心を与えるのである。」(以上、七六ページ)

国民の家といえ、隣国ドイツには「全き家」(Das ganze Haus)という理念があるが、国家は国という家なのであろうか。日本は国家という。日本ではネーションとステイトの双方にそれを充てる。ここに、これからの問題が潜んでいることを忘れてはなるまい。

また、スウェーデン・モデルは、資本主義と社会主義とを統合するものだともいえる。世界市場を指向する高度の生産

システムを持ちながら、その利益を連帯と公正の理念に従って分配するものとされる。

著者によると、スウェーデン・モデルの特徴は三つある。福祉制度が包括的であること、労使関係が協調的であること、合意形成を優先させる政治システム、いうなればコンセンサス・ポリティクスをもつことに求められる。

しかし、そのような合意形成が長い期間にわたってまがりなりにも可能であるためには、それを可能にする政治の価値なり理念が、国民に納得できるものでなければならぬであろう。それは、岡沢教授によれば、以下八つの「主導価値」であったとされる。いわく、自由、平等、機会均等、平和、安全、安心感、連帯感・協同、公正、これである。

これらは、言葉としてはそれほど目新しいものではないが、興味のあることは、こうした価値の優先度であり、その下に現実にとどのような政策が実行され、いかなる結果がもたらされたかであろう。

ただ、その結果の中で一つ、評者には皮肉に響く事実がある。それはスウェーデンがかなり強力な武器輸出国であるという事実である。この国は、中立国としてその評価は世界に

冠たるものを有するが、その裏には高度な武器による自国の国防システムを整備し、したがってまた武器産業も発達しているという現実も、福祉国家の裏面として、看過してはならない。

評者は、最近、スウェーデンに極めて詳しいある方の講話を聞く幸運に恵まれたが、すばらしい福祉制度の面を語るのみに、こうしたマイナスの裏面には全くお触れになれなかったもので、意外に感じた。そうした類いの「美しい」外国紹介は、もはや使えものにならないだろう。従来、ソ連東欧、中国などの社会主義に関する報告も、多分無意識に、事実の一面のみを美しく報告しているものが多かったようだ。今はだれでも簡単に旅行できて、学者だけが本当の情報を知っているのだ、とはいえない情報化時代。事実は丸ごとしっかりとらえないといけない、衆目の目は鋭いのに、と思ったものである。その点、岡沢教授の目はさすが公平であり、平和の代価と武器産業についても無視していない(八八ページ以下)。

福祉と言えば、女性労働、女性の社会進出、高齢者への福祉システムについても、確かに世界一の至れり尽くせりの政

策が施されているとあってよい。家族システムについての思想の違いが、ここでは問われよう。

さらに第三章は、政治システムの紹介である。これは著者のまさしく専門学領域であり独壇場である。スウェーデン政党政治、なかんづく社会民主党が、どのようにして長期政権を保持し、高度福祉国家を構築し、維持して来たか、その政治的側面を、まことにあざやかに解明してくれる。一人ひとりの政治的指導者の理念、性格まで浮き彫りにし、リーダーシップというものが国民の性格、要望とタイアップしつつ、歴史を生み出して行く様が、手に取るように分かる。これは、日本の政治分析にも十分つかえる認識手法ではないか。

我々は、民主主義と言えはアングロ・サクソンのスタイルのそれしか理念として共有していないが、民主主義にもいろいろあり得ることが分かる。スウェーデン社会民主主義の主流は、世界的に言えばソ連型のレーニン・スターリン的マルクス主義とは一線を画し、ドイツ社会民主党の右派とも近いといえよう。イギリスの労働党に集いあった労働者民主社会主義とも近いといえよう。

以前、評者にとってのスウェーデン・イメージには、ロッ

チテール式の協同組合というものに基礎を求める社会主義というような先入観があったが、それは必ずしも適切ではなかった。むしろ少数の巨大資本グループの所有する大企業群と、またそれと対抗関係にある労働組合連合とが、ゲームの中心選手であることが示される。

福祉社会を生んだスウェーデン政治の伝統は、一口にいえば、社会民主党プラスLÖ（労働組合連合）ということになる（二二〇ページ）。しかしそれは極めて現実主義的で、プラグマティックな性質を備えたものである。そうした柔軟な労働協調主義は「サルチオバーデンの精神」と呼ばれる（二二五ページ）。スウェーデン福祉国家には、こうした産業レベルでの協調的精神が、その政治の基礎にある。ここには、「ダメなものグメ」というしか言葉を持たなかった、いずこかの野党的社会主義党とは比ぶべくもない、したたかな年期の差を覚えるのは、評者だけに限られまい。

政治はやはり志を高く掲げながらも、プラグマティックであらねばならないものであろうか。スウェーデン政治のこうした特質については、岡沢教授には「スウェーデンの現代政治」（東大出版会、一九八八年）という好著が他にある。

(七) パブリック・セクターの過度の肥大化に伴うサービス精神の低下

(八) 過剰福祉による青年層への倦怠感の浸透

(九) 重税による地下経済の繁殖

(一〇) 高負担のゆえの青年の海外流出

新保守主義の立場からの批判は、七〇年代に強くなった。「微力な働き蜂が巨大なパブリック・セクターを背負っている」という印象を与えるらしいともいわれる（二四六ページ）。

確かに、七〇年代からは、スウェーデン経済の発展それ自体により、また国際経済の条件が変化したことにもよって、この国は「苦惱と行き詰まり」の原因を反省せざるを得なくなった。それは、P・メイエルソンらの分析に依拠して、以下のようにまとめられる。

① テクノロジーの国際化とスウェーデンの特権的優位の崩壊、特に新興工業国家群の追い上げ

② 運送技術の発展により、地球上のどこからでも欧州など巨大市場への接近が容易になったこと

③ エネルギー依存度の高いスウェーデン経済が、オイルシ

ただ評者としては、スウェーデン型連合政治が、なぜ日本にはなじみが薄いのか、政治を深層から動かす集合無意識に注目してみたい。この側面では、「和をもって貴しとする」という集団主義をお家芸とする日本型コンセンサス・ポリティクスとの比較が、興味深いテーマとなろう。

福祉国家の苦惱

しかし、万幸いつまでもうまく行くことはないのが、世の常。第四章では、一九七〇年代以降の、「苦惱する生活大國」の現状が描かれる。

スウェーデンの福祉国家型経済については、「批判の定審」というものがあると、著者は述べる。それは、以下のようなものである。

- (一) 過剰福祉による競争原理の阻害、国際競争力の減退
- (二) 官僚主義の万延
- (三) 勤労意欲と貯蓄意欲の低下
- (四) 高負担による企業革新力の窒息
- (五) 過剰な平等主義による画一化と自由な選択の制限
- (六) 国民総背番号性などによる管理社会化

ヨック以後、その国際競争力に打撃を受けたこと

④ 平和の継続により、スウェーデンだけが平和の恩恵を独占できなくなったこと

⑤ 豊かさになれた国民が不況期に自粛できなかったこと

⑥ 労働コストの上昇と国際競争力低下の悪循環

⑦ 福祉病の発現、つまり競争原理と連帯原理との矛盾、労働意欲の低下、経営意欲の低下

スウェーデン政治は「財閥をもつ民主主義」（二五六ページ）とも評される。なんと人口八五〇万余の小國が、世界大企業ランキング五〇〇社に一五社顔を出しているのだが、高度の生産力なしには、高度の生活はないわけである。経済がどうなるかは、スウェーデン福祉国家の今後の命運を左右するであらう。

スウェーデンも、七〇年代のオイルショックから八〇年代にかけて、世界的な構造転換に巻き込まれ、政策の選択を迫られた。それは、(イ) 肥大した公共部門を極小にしていることとするイギリスやアメリカの古典的自由主義風の政策か、(ロ) 公共投資の拡大による不況克服をはかる古典的ケインズ主義か、そのいずれをとるかであった。

しかし、この国は、これらいずれの政策をもとらず、第三の道を選んだ。すなわち、生産拡大、対外債務縮小、雇用確保、インフレ抑制という難しい組み合わせを追究する道である。大幅な平価切り下げ、賃金抑制、内需拡大・公共投資、産業構造の転換という荒療治が試みられた（一七六ページ）。

これは、生産の局面を見る限り、オイルショック後今日までの日本の政策とよく似た面をもつとは言えないか。いわばサプライサイド路線である。ただ大きな違いは、日本の特性は、国家公共部門での社会保障の比重を高める公共的な生活大國路線というより、企業福祉路線を求めたことにある。

ちなみに近年、（西）ドイツが新たなモデルであるかのよう注目する向きもある。いわく、経済的にみて、バランスした貿易配分、特定国に集中的に黒字をためていない、結構産業技術力も高い、ゆとりある社会と言う点からしても労働時間が短い、バカンスを楽しめる、土地問題や一局集中問題に悩んでいない、等々。

ある人は、特にアメリカとの貿易摩擦ともからんで、一方ではアメリカの主張する自由貿易システムへの接近をよしとするが、他方ドイツのように貿易を各国に散らして大量の黒

とは難しいだろう。国家の「ノーマリセーリング」（他国との間での制度や実態の接近）を迫られるだろう。

スウェーデンは今、他国はこの国を批判したり、モデルとしたりできるが、この国自身は「どこからも学べない」というフロンティア国家の宿命に生きる外ない所に達している、というのが著者の結論である。その意味では、日本も同じような海図なき時代に入りつつあるといえよう。

かつて世界大恐慌時代、スウェーデンは、「絶望の海に浮かぶ希望の島」（一九三八年の「ロンドン・エコノミスト」とも呼ばれた。が、著者岡沢教授が述べるように、北欧のこの国は、皮肉な立場におかれている。その経済の雲行きが思わしくなくなると、きまって幾分かあざけりの気持ちを含めて、話題にのぼる。特に社会保障や社会資本の水準の低い国ほど、スウェーデン批判、その高度福祉国家批判がぶり返す。

社会体制の比較を研究してきた評者も、これまで、世界的な文脈において、スウェーデンへの毀誉褒貶を幾度か見て来た。いわく、重税国家、高福祉高負担の国、労働意欲の低い社会、老人の孤独が深刻な社会、あるいは逆に高度な重工業技術の国、最近ではハイテクの国、平和中立の国家、環境先

字をアメリカから得るといふようなことをしなかったドイツの路線を称え、日本も学ぶべきであるという。このアメリカとドイツの結び付け論は、底の浅い見方であって、ドイツが今日のように貿易がバランスしたのは、自由貿易万歳ではなかったからであり、対外収支のバランスは慎重に配慮された対外政策の結果であったことを忘れてはならない。ドイツ・モデルは、アメリカ追従モデルと同じではない。単なる規制緩和とか単なる自由経済ではない。それを超えた異質の知恵があることを知るべきである。

本題にかえて、スウェーデンは、今、「福祉も成長も」という道を追及しようとしているようだ。公共部門は適正規模を越え、臨界点に達している。納税者の氾濫、労働者の氾濫、経営者の反乱が考えられる。

特に、国際化時代、一国だけで高度の福祉を支える生産力を維持するには、拡大する世界市場に積極的に参加するしかない。ソ連型経済が崩壊したのはそうした生産力の動きからくる必然性を物語る。

また現在スウェーデンはEC加盟問題を抱えている。その加盟のときには、この国だけが特別の福祉制度を維持するこ

進国など。日本でも、そのような正と負の評価を發する気風の移り変わりが、この数十年働いて来たことを記憶している向きも多いのではないか。けれど相手をどう見るかは、自己のかかえる問題にかかっているからであり、日本自身の問題が変転して来たからである。

世界史的にみれば、八〇年代末から最近までのスウェーデン評価は、どちらかといえば、プラスの追い風を背にしているようだ。実際、ソ連東欧におけるマルクス・レーニン主義スターリン主義的な社会主義の崩壊後、スウェーデンはソ連東欧の諸国民にとり、一つのモデルとして「熱いまなざし」を向けられていることは確かである。六月にストックホルム大学を会場とする国際会議に出席したが、アメリカのような粗野な資本主義には学べない、日本も文化が違い過ぎる、やはり近いところから学ぶほかない、という空気が色濃かった。

* * *

北欧のフロンティア社会がこれからどうなるか。それは日本にとっても他山の石であろう。日本は、政治、軍事、経済などややもすると声の大きいアメリカの方ばかり向く嫌いがあがるが、ワシントンとの付き合い方とともに、もっと広く異

なる文化との情報交流を試みるべきだ。

「ミネルバのふくろうは日暮れて飛び立つ」という。人間の知恵は、歴史の歩みに遅れるということを警告している訳である。

わさびの効いたコンパクトな小著とは、言うに易く、その実まことに書きにくいものである。思いの丈をだらだらと長く書くのは、いとたやすき仕事である。現代日本における中堅スウェーデン研究者として自他ともに第一人者と認める岡沢教授の手になる本書は、珠玉の作品という言葉も、決して過ぎたる評価とは響かないであろう。日本の将来方向を模索しつつある人々に、広く、本書の一読をお薦めしたい。